

松富かおりの「世界と日本の安全保障」②

イスラエルは何故、ここまでやるのか？

ジャーナリスト・元駐イスラエル大使夫人 松富かおり

ハマスの終わりの始まり

ガザでは、イスラエルの猛攻が続く。現時点で、ガザの人口の85%、200万人弱が住居を追われた。市民の生活環境は悪化。食料も水も足りない。医療は崩壊し、感染症が蔓延。イスラエルは物資を搬入する検問所を増やし、「支援物資は倍増する」と説明。だが、パレスチナ市民の窮状に、イスラエルへの非難が高まりつつある。

が、イスラエル軍は「ハマスの幹部がいれば、ガザのどこであれ、作戦を続ける。彼らが逃れる場所はない」と、『ハマスの壊滅』を指す事を鮮明にしている。イスラエル軍はハマスの戦闘員の移動や武器の保管を防ぐ為、約480kmと言うガザのトンネルに海水を注入。注入完了には数週間かかる予

定。既にハマスの戦闘員数百人が投降し、その中には司令官すら含まれる。「ハマスの終わりの始まり」が見えてきたと言えそうだ。

しかし、第1に、人質問題が解決していない。イスラエルは12月8日未明にかけ人質救出作戦を行ったが、失敗。軍は「人質を発見し、連れ戻すのは国家的任務」と強調する。軍によるとハマスの過激派「イスラム聖戦」に今も捉えられる人質は135人。

第2に、この戦争の落とし所が見えない。これまでハマスを資金面で支援してきたカタール以外のアラブ諸国はハマスの距離を置く。ハマスの高官は、中国と「強く、良い関係にある」と胸を張る。しかし、ハマスの国際的孤立は明らか。「民間人は狙われない。高齢者や子供は間違っって攫われ

た。」とのハマスの主張は、信憑性が全く無い。ガザ地区トップのシンワル幹部の拘束・殺害があれば、一旦、落ちつきを探る機会も出てくるかもしれない。だが、イスラエルのコーヘン外相は「国際的な支持が無くとも、ハマスの戦争を続ける」「現段階での停戦は『ハマスの贈り物』になり、ハマスが再びイスラエル市民の脅威になる」と「人道的な即時停戦」を求める国連総会決議も意に介さない。

しかも、「ガザの未来」に関し、米バイデン大統領が、ガザもパレスチナ暫定政府(PA)に任せ、2国家共存を目指すのに対し、ネタニヤフ首相は「オスロ合意の過ちは繰り返さない」と断言。オスロ合意とは1993年、パレスチナとイスラエルの共存を目指した合意だ。PAがヨルダン川西岸と

ガザも統治する前提だった。が、ネタニヤフ首相はバイデンに「ガザをPAに渡す為に、イスラエル軍がガザに地上侵攻する事はない」と明言。国民の総意ではないにしろ、ハマスの壊滅の暁にはイスラエルがガザを直接統治する、という意思を示唆した。

前回、筆者はテロが頻発する時期に彼の国で暮らした経験に触れた。襲ってくるのはロケット弾だけではなく、人が突然車の向きを変え、停留所など人が集まる所に突っ込んでくる。隣を歩いていた人が急にナイフで襲ってくる。婦人のお茶会でも「ナイフで襲う相手を掌で防ぐ事はできない。腕か鞆で防ぐ」「襲われたら、退くのではなく、1歩前に出る。相手が逆を突かれバランスを崩した隙に鞆や、コートで撃退する」など真剣に対処法を学んだ。テロが日常的に起こる場所で暮らすとはそういう事だ。常に、隣人が自分の命を奪いにくるかもしれないと身構えて生きる事なのだ。ネタニヤフ首相は、ハマスを掃討してもガザに新しい過激派が現れる事を危惧するのだろう。

この多くのイスラエル人が共有する

「安全への執念」とも呼べる感情は長い歴史の中で培われた。

イスラエルを 地図上から抹殺する

筆者はイスラエル人ほど、過去、自分達に起こった事件の記憶を継承し、毎年それを祝う伝統を守る民族を他に知らない。全ては虐殺の歴史を次代に伝えるものだ。モーセの出エジプト記は多くの方が知っているだろう。長い放浪を経てカナン（現在、パレスチナと呼ばれる地域）の地に戻ったユダヤ民族は2000年ほど安定した生活を送り、紀元前9世紀にイスラエル王国は繁栄の絶頂を迎える。やがて衰退した王国はアッシリアやバビロニア、アレクサンダー大王の東方遠征に飲み込まれ、ユダヤ教を禁止される。ユダヤ人は何度も蜂起し、遂に自治独立を勝ち得たものの、後に、壮絶な戦いの末ローマ軍に最後の砦も陥落させられた。その後世界中に散ったユダヤ人は、2000年もの間、想像を絶する苦難に耐えなければならなかった。日本人の多くが知るホロコーストは、その中のほんの1ページでしかない。

ユダヤ人の多くはヨーロッパを目指した。3歳から文字を学ぶユダヤ人男子の商才に目をつけ、移住を受け入れても、ほとんどの国で、ユダヤ人は「異端者」だった。彼らは多くの場合、土地を持つ事を許されず、ゲットーに住む事を強制され、周りの人々は差別を当然と思っていた。ユダヤ人が理由なく暴行を受けても罰はなく、領主が変われば、突如、財産没収の上、追放される事も多かった。ペストが流行ると「ユダヤ人が、井戸に毒を入れた」と疑われた。17世紀から19世紀に「ポグロム（破壊）」と呼ばれるユダヤ人に対する集団的略奪や虐殺がロシア、ドイツ、ポーランドで何度も起こった。宗教上、食習慣や「安息日（金曜日から土曜日）」が異なるユダヤ人は固まって暮らす事が多かったし、他の国の習慣に馴染みにくかった。『異端』と見られやすい状況は確かにあった。

しかし、各国で起こった大規模な虐殺やホロコーストを正当化できる理由など無い。筆者はキリスト教徒に問い続けたが、多くは「ユダヤ人のせいではキリストが殺されたから」「教会でユダヤ人は悪と教わった」という非論理的な理由だった。キリスト殺害は2000年以上も前の事で確たる証拠もない。命令を下したのはローマの総督だ。ユダヤ民族を2000年に渡って虐待する理由にするのはおかしい。ユダヤ人作家アモス・オズは筆者に「私達は長い間ヨーロッパに恋をしてきた。しかし、ヨーロッパが私達を愛し返してくれる事は遂になかった」と悲しげに語った。2000年に及ぶ苦過ぎる経緯からユダヤ人は「自分達の国を創らなければ、ユダヤ民族は永久に安心して暮らす事はできない」と悟り、カナンの地の土地を買い集め、移住する計画を立てる。

買い取られる土地が増えると、周りのアラブ人との摩擦が激化。遂にアラブ側は第1次中東戦争を仕掛けた。15万の正規軍を誇るアラブ連合に対し、ユダヤの民兵は3万。武器も十分でなく、15人にライフル一丁しかない。が、アラブ連合は敗北。イスラエル建国という奇跡が起きた。2000年に及ぶ「執念の勝利」だ。歴史を見れば、イスラエルがヤマアラシのように周囲を寄せ付けない軍事国家になるのは必然だった。75年の間に4度も戦争を戦ったアラブ諸国に囲まれ、イランもハマスも「イスラエルを地図上から抹殺する」と公言してきたのだから。筆者は「明日は戦場にいるかもしれない」という本に書いたように70カ国以上の人々と交流を持ってきた。その上で、日本が比較的、宗教に寛容な国である事を誇りに思う。世界中で宗教による争いが起きてきた。パレスチナ人のイスラム教も、ユダヤ人のユダヤ教もキリスト教も、同じ聖典（聖書）を信じ、同じ創造主を信じる。しかし、彼らの間で争いが絶えた事はない。十字軍など、キリスト教徒によるイスラム教徒とユダヤ教徒の虐殺だった。日本では宗教による大戦争が起こった事はない。信長の比叡山焼き討ちは力を持ち腐敗した宗教団体を駆逐する為だったし、家康のキリスト教禁止も、日本を狙って布教を梃子に入り込もうとする外国から国を守る為だった。筆者は、日本という国が将来も、宗教を理由に戦争を起こす事がないと信じられるだけでも、日本人は幸せな民族だと思ふのだ。



『明日は戦場にいるかもしれない』